RAKUNO GAKUEN UNIVERSITY
酪農学園大学

出会い

No.86 2022. 4. 5
キリスト教委員会

藻岩山から見た二重の虹【撮影：髙橋　優子】

「雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべての肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」

（創世記９章16節）

農福連携（農業と福祉のコラボ）は、農業を通した共生社会の実現に寄与できる活動です！

循環農学類　作物学研究室　教授　**義平　大樹**

大学で何を学ぶのか、何のために学ぶのか？
―混乱と喧騒の中で考えてみた?!―

環境共生学類　環境法研究室　教授　**遠井　朗子**

「出会いは成長の糧」

2021年３月獣医学類卒業　ハートペットクリニック　獣医師　**今川　雄裕**

農福連携（農業と福祉のコラボ）は、農業を通した共生社会の実現に寄与できる活動です！

循環農学類　作物学研究室　教授　**義平　大樹**

農福連携って知っていますか？

循環農学類の義平大樹と申します。専門は作物栽培学です。新入生の皆さん入学おめでとうございます。農福連携って知っていますか？農福連携とは、「担い手の高齢化と減少が進む農業分野」と「障がい者や生活困窮者らの働く場の確保や賃金向上を求める福祉分野」が連携してWin-Winの関係を築いていこうとする社会活動です。パラリンピックが、スポーツを通した共生社会の実現に貢献することがよく言われています。私は、この農福連携活動は、農業を通した共生社会の実現に寄与でき、農業の社会的意義を増す活動であると考えています。実施件数は、少なく見積もっても全国で4000件、北海道でも350件を超えるとされております。この数年に実施件数は急速に増加しております。

農福連携の推進運動に参加するきっかけ

私が農福連携の推進運動に参加するきっかけは、私の２人の息子が知的障がいを併せ持つ自閉症児として生まれてきたことです。この２人の息子のために、父親として何ができるのだろうと考えた時、専門の作物栽培に関連する分野で、就労困難な知的障がい者の雇用を作り出すことだと考え、農福連携の推進運動を始めました。江別近郊を中心に農福連携に関心を持つ農業者と福祉事業所のマッチング、北海道中央部を中心に農福連携を導入、またはステップアップしようとする時の研修会講師、農福連携推進のための提言などをやらせて頂いております。

農業技術よりも、むしろ高齢化と労働力不足にあえぐ農業

農業技術は、従来からの作物や家畜の遺伝的改良と、その潜在力を引き出す栽培管理や飼養管理によって、大きく進歩しています。さらに近年のスマート化によりその速度は加速しています。しかし、いくら高度な農業技術があっても、それを実践する担い手がいなければ、農業は衰退します。農水省の統計によれば、全国の農業従事者数（以下、農業者）は、この20年に40％減少し、その平均年齢は2020年現在67.8歳、65歳以上の占める割合が65％（北海道40％）で、他産業にないペースで高齢化しています。さらに、農繁期に農業者が求めている季節雇用労働者（北海道ではでめんさん）の確保は困難であり、シルバー人材も農作業実施困難なほど高齢化が進んでいるのが実態です。そのような情勢の中、今まで注目されてこなかった潜在的な労働力である障がい者や生活困窮者が引き受け手として、期待が高まっています。

就労先および工賃向上を求める障がい者

一方、福祉事業所に通う障がい者の全国平均の月給は、厚労省の資料によると雇用契約を結ばない障がい程度が比較的重い障がい者が通う福祉事業所（B型）では15603円です。農福連携に取り組み始めた福祉事業所の74％が賃金増加しています（2019年農水省調査）。

10年以上前の話しになりますが、私の知的障害を持つ長男が最初に通っていた福祉事業所の工賃（時給）は50円程度、1ヶ月の給与が3500円で、給与明細を最初にみた時、「障がい者の世界はこれでも違法ではないのか？」と愕然とし、悔しさがこみ上げてきました。この経験も私の農福連携に取り組む原動力の一つとなっています。

農福連携を初めて実施する際には、さまざまな誤解を乗り越える挑戦がある。

農福連携の理解が浸透していない組織やその関係者に対して、誤解を乗り越えて頂く必要があります。農業者からは「障がい者に農作業なんてできるのか？」、保護者からは「障がいがあって体力もないうちの子に、きつい農作業をやらせるなんて可哀そう」、福祉関係者からは「うちの利用者（福祉事業所に所属する障がい者）が農作業に参加できるなんて、想像もつかない？」などと言われることがあります。この場合、下記の３点が理解されていないことを説明します。①農作業を分割し、任された作業に集中して、しっかりやれば、障

がい者でも農作業もこなすことができる（農作業分割の視点）②農業者の農作業に関する指示を、農業ジョブトレーナーが聞き、障がい特性を考えながら、農作業を分割して、障がい者チームとして農作業をこなす（農業ジョブトレーナー仲介の視点）、③農福連携に参加した障がい者が健康増進、職業能力の向上の実例の紹介、その後、実習期間を設けて、農業者および福祉関係者が障がい者チームに可能な農作業を確認し、事前マッチングすることをお薦めしております。

農福連携の導入時の留意点

農福連携を導入しようとする際に、農業者は、障がい者チームに農作業の指示を出す福祉側の農業ジョブトレーナーや障がい者が農作業に慣れていくのに時間を要することを認識することが大切です。決して①低賃金で雇える季節雇用労働者②導入後即戦力として期待できるなどと誤解してはなりません。最初は、早急に急ぐ農作業よりも、いつかは着手しなくてはいけないが他の作業管理業務に追われて、集中して取り組めない作業（片付け・清掃・残渣処理）から始めます。農作業に慣れ、効率の向上とともに③除草→④出荷・調製→⑤収穫・選別など重要な農作業へ拡大していく長期的な展望を持った配慮が必要です。

農福連携は農業の社会的価値を増し、SDGsに貢献できる要素を増やす。

他産業からみた時の農業の社会的意義は、①食糧生産、②環境保全（持続可能な技術を実践できている場合）、③農村社会の維持で、SDGsで言えば、直接的には2.飢餓をゼロ、15.陸の豊かさを守ろう、間接的には持続可能な農業が展開できれば、1.貧困をなくそう。13.気候変動に具体的な対策に貢献できる産業です。農福連携実践にアプローチすると、日本の人口減少社会、高齢化社会の福祉を支えるという新たな社会的意義を増すとともに、SDGsでは3.すべての人に健康と福祉を、8.働きがいも経済成長にも貢献できることになります。

農福連携の継続は地域を活性化し、農業を通した共生社会の実現を進める。

最初は、農業側の人手不足と福祉側の工賃向上の要求から必要に迫られて、開始するケースがほとんどです。農業側が農福連携の実践を継続し、それが地域で蓄積され、面的な活動になると、今までにないものが生まれるケースがあります。①就労機会に恵まれていなかった障がい者の就労、②低賃金しか得ることのできなかった障がい者の工賃向上に加えて、③今まで廃棄されていた規格外農産物の利用④福祉側の地域農産物の販売協力によるブランド化⑤高齢化と担い手不足により伝承できなくなった伝統野菜の、農福連携実践福祉事業所による継承など、地域に暮らす多くの方々を活性化している事例が増加しています。

さらに、農福連携を継続し普及する過程において、農業側が自然と、障がい者福祉に対する理解を徐々に深めていくことになります。パラリンピックがスポーツを通した共生社会の実現に貢献しているのと同様に、農福連携の継続は農業を通した共生社会の実現の推進を進めていることに他なりません。

農業系大学の果たす役割

SDGsへの大学の貢献も問われる中、農業系大学である本学の農福連携への関与は不可避の情勢にあるとも考えられます。具体的にできることは、①農にも福にも明るい人材（将来の農福連携コーディネイター）を輩出する。②農福連携を推進するための技術開発　③大学キャンパス内での農福連携の一部実践と、それに基づく実習教育　④就職、修学困難学生に対する農福連携を利用したキャリア育成プログラムなどが考えられます。農福連携が、単なる農業側の労働力不足対策にとどまらない広い意味を持つことを心に留めて頂ければ幸いです。また、ご関心のある方は分野を問わず、是非一緒に考えいきましょう。一部の学生さんがサークルの結成を考えていますので、気軽にお越し下さい（C6-303）。

最後に農業が最も貢献できるSDGs「2.飢餓をゼロ」に関する聖書の御言葉の一つを掲げておきます。「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません」（ヨハ6：35）

竹内農園における障がい者によるレタスの定植作業

大学で何を学ぶのか、何のために学ぶのか?
― 混乱と喧騒の中で考えてみた?! ―

環境共生学類　環境法研究室　教授　**遠井　朗子**

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。

新型コロナの感染拡大で混乱が続く中、困難を乗り越えて、新たなスタート地点に立ち、多くの方は晴れやかな気持ちでいっぱいであろうと思います。一方、日常生活が厳しく制限される中で、「大学で何を学ぶのか?」、「何のために学ぶのか?」と自問し、確信をもって答えられないまま、ここに座っている方もいらっしゃるかもしれません。

実は、これらの問いについて、私たちも（少なくとも、私は）、明快な答えを持ち合わせていません。「大学で、何をどう教えるか?」という課題へのアプローチは、現在、試行錯誤の途上にあります。日本国憲法の下、「学問の自由」は保障されていますが、今や各教員が自らの研究成果を自由闊達に論じるだけでは十分とはみなされず、何をどう教え、どのような教育効果があるかを説明できるよう計画を立て、資料を準備し、課題を提示することが求められています。昨年来の遠隔授業で、このような標準化のインフラ整備はさらに進み、知識を効率よく伝え、定着させるための様々な工夫が可能となりました。劇的な社会変化がなければ進まなかったかもしれない教育のデジタル化が一気に加速したのは、この間の数少ない成果といえるかもしれません。

しかし、課題もあるように思われます。例えば、レジュメや資料を準備すればするほど、説明を聞き流す学生が増え、課題に対しては、定型的な答えしか返ってこないことが少なくないように思われます。手元に必要な情報があれば、つまらない授業を聞く必要などないと、省エネモードに切り替わるのは、ある意味自然なことで、教える側も、自らの研究について、多少の逸脱も含めて熱く語り、活発な議論を喚起するのではなく、これが必要だろう、とみつくろって、冷静沈着に伝えるメッセンジャーに徹するなら、わざわざ教室に集まって、講義を受ける意義は薄いと思われても仕方のないことかもしれません。

新たな技術が利用可能となり、学修者主体の教育が唱道されていても、なぜ学ぶのか、何をどう学ぶのか、という点については、互いの理解が共有されず、大学のシステムも、変化に十分には適応できていないのではないか、と思うところです。

まず、大学で何を学ぶのか、という点について。もしかすると、８割ぐらいの方は、自分の能力を高めるため、必要な知識や技能を学びたい、と答えるかもしれません。手元に資料があるから後で見ればよいとか、Googleで検索すれば良い、という心性は、知識の入手可能性を重視する点で、この考え方の延長線上にあるかもしれません。

しかし、現代社会では、知識の価値は目減りしています。英語圏では、最新の研究成果に基づくハイレベルな授業が無料で公開されており、知識はもはや専門家が独占する稀少資源ではなく、誰もがアクセスできる共有物となったように思われます。さらに、ポスト産業化社会において、社会基盤を形成する知識は常に更新され続けるため、熟練したこんぺいとう職人の技能のように、持ち運び自由で、一度身につければ一生もの、とはなりません。

では、大学で学ぶ価値がどこにあるかというと、すでにある知識を身につけることではなく、これまで誰も見たことのない知を生み出すための知を身につけることだ、というのが、おそらくは、最近の一般的な理解です。2019年、東京大学入学式の伝説のスピーチで、上野千鶴子さんはこのような知を生み出す知を「メタ知識」と呼び、メタ知識を身につけてもらうことが大学の使命である、と指摘されていました。バラバラな知識をより上位の枠組みの下で統合したり、別の文脈にあてはめたり、という抽象度の高い操作を通して、新しいものの見方を示すことが期待される、ということではないかと思います。また、これから求められるのは、メタ認知能力が高い人だ、とも言われています。メタ認知能力とは、自分自身を俯瞰的に眺めて適切な行動を選択し、適宜、修正を行い、他者の意図をくみ取り応答する人、というイメージでしょうか。知識が価値を生む時代に求められる能力は、なかなか面倒くさそうです。

ジュネーブのパレ・ド・ナシオン前の『壊れた椅子』のオブジェ

しかし、少し考えてみると、このような能力の習得は、雑念に惑わされる人間より、AIの方がはるかに得意そうです。同世代の５割の若者が大学で時間を潰さなくても、性能の良いAIを開発してもらった方が社会の発展のためには、効率的ではないでしょうか。自らの能力を高め、社会内のポジション争いで優位に立つ、というライフハック的思想に基づいて教育を受けるのであれば、AIを乗り越えることはできず、虚しい努力となりかねません。

それでは、なぜ、大学で学ぶのか。既にある知識の積み上げを超えて、新たな知が生みだされるのはどのような場合なのか。私は法と社会の相互作用の中で、共有された規範認識が変化していくことや、そこでは制度が重要な意味を持つ、等という、法学と社会科学との境界線上の議論に関心を抱いてきました。その限られた知見に基づき、ごく単純化していえば、社会の集合知としての新たな価値観は、異なる文化や価値の摩擦を通して、立ち上がってくるように思われます。例えば、宗教戦争に端を発し、欧州全域を巻き込んだ30年戦争の後、世俗的な主権国家が併存するウェストファリア体制が成立し、今日の国際社会の原型となりました。また、二度の世界大戦の反省に基づき成立した国連は、普遍的人権の保障や国際協力が平和の土台であるという理念を確立し、共存から協力へと、国際社会の構造転換を促した、と評価されています。日本国内においても、#Mee Tooや「わきまえておられる」発言への批判とバックラッシュを経て、性別役割分担を是認する表現は、さすがにちょっと、とみなされるようになり、LGBT法案や選択的夫婦別姓制への賛成も、近年、急増しています。後者については、なぜ、急に変化したのか、直接のきっかけはよくわからないものの、社会内での論争を通して、人権やジェンダーに強い関心を持つ層だけでなく、幅広い人たちの関心を喚起することで、共有された規範認識が変化し始めたように見えます。少し話がずれてしまいましたが、新たな知は、価値の対立や摩擦から生み出され、それが社会に波及していくことで、社会変化を引き起こすとすれば、大学をそのようなアイディアの「ゆりかご」として、あるいは「実験室」と位置づけて、予定調和的な意見の一致よりも、多様性の下での議論を促進することが望ましいように思われます。

では、なぜ、新たな知が求められるのか。この２年間、既存のシステムが脆弱で、あてにならないことに驚愕し、苛立ちを感じた方は、新たな社会への移行は不可欠という前提に、賛同頂けるのではないでしょうか。そして、ポストコロナの復興をどう進めるか、残りわずかなカーボン・バジェットを使い尽くさないよう、脱炭素化をどう進めるか等の喫緊の課題について、旧世代は頼りにならない、という点についても同様です。経済成長至上主義から、社会的協働に基礎を置いた社会への転換を実現できるのは、むしろみなさんの世代かもしれません（斎藤幸平『人新世の資本論』集英社新書、2020）。若者ばかりあてにしないで！と言われるかもしれませんが、経済成長よりも幸せ（well-being）、多様性と包摂、足ることを知る、そして持続可能性を重視するZ世代が、社会システムをカスタマイズして、社会の中枢を担う頃には、今よりもう少し柔軟で強靭な社会が生まれているように思います。そのためには、心地よいエンターテイメントの世界から一歩出て、他者と出会い、戸惑う経験を重ねて頂きたいな、と、期待を込めて思います。図書館へ行けば、時代を超えて、多様な著者との出会いも待っています。水俣の漁師のアニミズム的世界観が（石牟礼道子『苦界浄土』河出書房、2011）、フランスの哲学者の世界認識とよく似ている（ブルーノ・ラトゥール『地球に降り立つ：新気候体制を生き抜くための政治』、新評論、2019）という発見もあるかもしれません。

もうお分かりのように、なぜ、大学で学ぶのか、という問いは、「オープン・クエスチョン」です。様々な出会いを通して、自分だけの（固有の）、同時に、多くの人たちと共有できるような普遍的な答えをみつけて頂くことを期待しています。

「出会いは成長の糧」

2021年３月獣医学類卒業　ハートペットクリニック　獣医師　**今川　雄裕**

新入生の皆様ご入学おめでとうございます。北海道の４月は寒くて、まだまだ冬だなーと私と同じように感じた人も多いのではないでしょうか。私が入学した当時もとても寒く、大学に通学するのが大変でした。江別市は風も強く、入学してすぐに傘を３本ほど壊されたこともありました。本州から引っ越して来て、寒くて不安に感じる方もいると思いますが、北海道の夏は本州よりも過ごしやすいと思います。また、北海道の大自然は、本当に素晴らしいと思います。私も最初は不安に感じることもありましたが、いつの間にか北海道に永住したくなるほど大好きになりました。北海道でのキャンパスライフを楽しんでください。

全国各地から入学生のいる酪農学園大学には、様々な境遇の人がいると思います。高校を卒業したばかりの人、何年も浪人し合格をした人、大学を卒業してから再受験をした人、社会を経験してから大学で勉強し直すことに決めた人など、このような様々な人に出会えるというのも酪農学園大学の魅力だと思います。ちなみに私は、北里大学という大学を卒業してから、酪農学園大学に入学した再受験組の一人です。再受験での入学という事もあったので入学当初は、上手くやっていけるかなと不安に思うこともありました。しかし、酪農学園大学には、寿会という私のような再受験の人や、他にも様々な境遇の人が集まる会がありました。入学後すぐに寿会に参加し先輩方から様々な話を聞き、私とは比べ物にならないくらい様々な経験をしている人がたくさんいました。そんな人達が皆、獣医師を目指すために大学に入学していて面白いなと思ったのを今でも覚えています。６年間酪農生として過ごし、様々な人に出会い、話をすることができたことは、自分自身を大きく成長させたと思っています。皆様もどんな境遇の人にも臆することなく、自分の周りの人にどんどん話しかけて様々な人間関係を築いていってほしいと思います。自分で壁を作らない事、思いやりを持って接する事がとても大切だと思います。

私は北海道で過ごした６年間で様々な経験をする事ができました。農家でアルバイトをしたり、大雪の中で雪かきに奮闘したり、エゾシカやヒグマなどの野生動物に遭遇したりと北海道でしか経験できない事もたくさんあったと思います。大学生活の４年間、または６年間は人生の中でも本当に貴重な時間になると思います。是非とも様々なことに挑

戦し、就職してからも大学生に戻りたいなと思えるような素敵な時間にして欲しいと思います。

私は、酪農学園大学を2021年の３月に卒業しました。私が６年生の1年間は新型コロナウイルスにより、ほとんどの授業が遠隔授業でした。国家試験の時期には、感染に怯えながら勉強していました。卒業式も卒業生のみの参加で、謝恩会などのイベントもほぼ中止、挙げ句の果てには、引っ越しでアパートを退去した後に濃厚接触者として保健所から連絡があり、北海道から出ることができず帰る家が無くなったこともありました。新型コロナウイルスの影響で、貴重な大学の最後の1年間で遠くに出かける事もできずに過ごしてしまったので、当時は、卒業旅行もできずこのまま就職かーとすごく残念に思う事もありました。今では自分達にしか経験する事のできなかった特別な思い出として心の中に残っています。新型コロナウイルスの収拾がつき、以前までの日常が取り戻せたら私たちの経験が笑い話になって話せていればいいなと思っています。

現在、私は動物病院で小動物臨床の研修医としての日々を過ごしています。小動物臨床という現場は波乱の毎日です。交通事故にあった犬猫が来たり、おもちゃを食べてしまったなどの急患が来たりする事もあれば、すごく平和な1日もあります。臨床1年目は右も左も分らずとても大変ですが、体調の悪かった患者が日に日に元気になっていく姿を見ることができ、とてもやり甲斐を感じる毎日です。上手くいかない事で落ち込んだりする日も多々ありますが、そんな時は、大学の同級生達とビデオ通話をしたりして皆で励まし合いながら頑張っています。私の友人達も全国各地で、様々な形の獣医師として頑張っているため、負けてられないなととても励みになっています。また、私と同じように小動物臨床医として働いている友人達とは、どんな治療法をしているかなどの意見交換をしたりアドバイスをし合ったりとたくさん情報交換をしています。大学を卒業してから強く思うことは、大学の同級生は卒業してからも特別な存在になるという事です。学生時代には、友人関係が上手くいかなくて悩んでしまう事もあると思いますが、卒業後には必ず自分の力になってくれる存在になってくれると思います。是非とも、酪農学園大学で素敵な友人達と出会い、素敵な学生生活を送ってください。

診察室での診療風景

積丹半島から見た海（積丹ブルー）【撮影：髙橋　優子】

あとがき

新型コロナの問題も３年目に入りました。これを書いている１月現在は、オミクロン株の感染力が強く、感染者が増加しているため、またもや北海道にも規制がかかるというニュースが流れております。これ自体は悪いニュースのようですが、ウイルスの弱毒化がここまですすめばもうすぐ収束という見通しを持つ研究者の意見も聞かれます。表紙の写真のように、ずっと雨だったところに薄日が射して虹が見えている状況なのかもしれません。虹は聖書では「契約の虹」と呼ばれ、神が二度と洪水（「ノアの洪水」物語を受けている）で生き物を滅ぼさないことを誓った約束の徴として現れます。裏表紙の写真のような晴れ渡った空のもと、美しい水を眺める日が待たれます。

（Y.T.）

酪農学園大学キリスト教委員会
〒069-8501　北海道江別市文京台緑町582番地
Tel. 011－386－1111（代表）

酪農学園大学は、2020年度（公財）日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価において大学評価基準に適合していると認定されました。

〔酪農学園大学公式サイト〕